

## 第一章 匂宮の物語 春、匂宮、宇治に立ち寄る

[第一段 匂宮、初瀬詣での帰途に宇治に立ち寄る]

\*如月の二十日のほどに、\*兵部卿宮、\*初瀬に詣でたまふ。 \*「如月の二十日のほど」は橋姫巻末の十月初旬の話題から、年が明けた二月の話題となっている。注には<薫二十三歳二月。仲春、花の盛りとなる。>とある。 \*「兵部卿宮」は匂宮で、薫君の一つ年上なので24歳だ。 \*「はせにまうでたまふ」は注に<匂宮が初瀬(長谷寺)に参詣する。宇治はその経路。>とある。薫君が出生の秘密を知る事になった十月の宇治行きに先立って、宇治の姫君の話題を匂宮に面白がって聞かせていた(橋姫巻三章九段)ことから、匂宮は長谷寺詣でを口実に宇治に立ち寄るという日程を組んだらしい。何か表向きの尤もらしい理由がなければ、軽々に外出も出来ないのが親王という身分らしい。

古き御願なりけれど(昔の満願御礼参りだが)、思しも立たで年ごろになりけるを(行きそびれて何年にもなるものを)、宇治のわたりの\*御中宿りのゆかしさに(宇治川沿いの御旅宿の楽しみを)、多くは催されたまへるなるべし(主眼に匂宮が企画なさったものなのでしょう)。 \*「おおんなかやどり」は<御休憩所>だろうが、一時休憩ではなく<旅宿>らしい。それで、下文先読みは不本意ながら、当文だけでは話の筋が分かり難く文意が取れないので、雑観で少し先読みした所、これが匂宮一行の大行列を収容する大邸宅であるらしい。

\*うらめしと言ふ人もありける里の名の(「うち」を「憂し」に掛けて詠む歌も多く、恨めしいという人もあるような里の名が)、なべて睦まじう思さるるゆゑもはかなしや(匂宮には普通に親しく思われなさる理由というのも、姫目当てとは他愛がありません)。 \*「うらめしと言ふ人もありける里の名」は「宇治(うち)」を「憂し(うし)」に掛けて詠む歌が多い事に洒落た歌人らしい言い回しらしい。注には、そうした参照例が<『異本紫明抄』は「忘らるる身を宇治橋の中絶えて人も通はぬ年ぞへにける」(古今集恋五、八二五、読人しらず)。『花鳥余情』は「わが庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」(古今集雑下、九八三、喜撰法師)を指摘。>とあるようだ。

上達部いとあまた仕うまつりたまふ(重役たちがとても大勢お供に仕えなさいます)。殿上人などはさらにもいはず(部課長などは勿論の事)、世に残る人少なう仕うまつれり(都に残る役人が少なくなるほど多くの者が付き従います)。

六条院より伝はりて(六条院光君から引き継いで)、右大殿知りたまふ所は(源右大臣が管理なさっている宇治川沿いの別荘は)、川より\*遠方に(川の対岸にあって)、いと広くおもしろくてあるに(とても広く風流に造園してあって)、御まうけせさせたまへり(匂兵部卿宮は其処を御旅宿としてご準備なさっていらっしゃいました)。 \*「遠方」は「をち」と読みがある。「をち」は古語辞典には「彼方」と表記され<遠方>や<遠い過去や未来>でもあるようだが、「川よりをち」と言えば<川の向こう岸>のことらしい。なお、この別荘地について注には<『花鳥余情』は、藤原道長から頼通に伝領された宇治平等院を準拠とする。京から見れば宇治川の対岸、南にある。なお八宮の邸は此岸にある。>とある。

大臣も、帰さの御迎へに参りたまふべく思したるを(源大臣も匂宮の長谷寺詣での帰途のお迎えにこの別荘にお出掛けなさろうとお思いだったが)、にはかなる御物忌みの(急に凶日の占いが

出て)、重く慎みたまふべく\*申したなれば(嚴重に謹慎なさるべしと陰陽師が申し立てたので)、え参らぬ由のかしこまり申したまへり(参上できないというお詫びを大臣は申して来なさいました)。\*「申したなれば」は注に<陰陽師が進言した。「申したなれば」は完了の助動詞「たる」の撥音便、無表記形に、伝聞推定の助動詞「なれ」が接続した形。>とある。この主語省略は、当時の風習からすれば、こうした進言は占い師がしたものに決まっています、その占い師とは陰陽師だということが誰にも分かる、という事情からなされたものらしい。が、それでも陰陽師の誰が言ったかによって、大臣たるもの、其に従う従わないは決した筈なので、そのあまりの説明の不十分さに、本当に源殿は不吉と思ったのか、方便だったのか、その文意さえ掴めず、苛立たしいし、誰かが「申した」のだから、是は見立てであって、急な不幸があったという事情ではなさそうだななどと、内容の咀嚼にも多くの時間を要する文であって、私には本当に気に入らない厭な語り口だ。

宮、\*なますさまじと思したるに(匂宮は少し華やぎが削がれて興ざめにもお思いになったが)、\*宰相中将(宰相中将の薫君が)、今日の御迎へに\*参りあひたまへるに(大臣の代理の御迎え役に参上なさっていたので)、なかなか心やすくて(却って気楽に)、かのわたりのけしきも伝へ寄らむと(八宮の姫君たちの様子も薫君から聞き知れるかと)、御心ゆきぬ(御満足なさいました)。\*大臣をば(兵部卿宮は右大臣の源殿のことは)、うちとけて見えにくく(気安くは思え難く)、ことごとしきものに思ひきこえたまへり(煙たい存在に思い申しいらっしやいました)。\*「なますさまじ」の「すさまじ」は<興ざめだ>で、此処の「なま」という接頭語は<中途半端に>というよりは<何となく、少し>くらいの語感に思えるし、それはやはり大臣が大所帯で動く物々しさが、自分の興行に花を添える、という期待が実現しなかった、という失望なのだろう。ただ、「なま」に疑義の語感があるとしたら、大臣の言い訳が方便だという意味になるが、どうなんだろう。\*「宰相中将」は<薫君>らしい。確かに、薫君は年は若い、源右大臣の弟君であって、大臣の代理を務めるという立場上は、此処ではこの役職名で呼称する事が相応しい場面なのかもしれないが、匂宮と薫君の親しい間柄を思うと、そしてそれがこの物語での主軸である事を思うと、少し違和感がある。が、それを踏まえた上での、そういう近い二人が公の場では如何に貴人同士であることを示す為の、敢えて<薫>を省いた呼称なのだろう。さて、是で役者が揃ったわけだが、此処で改めて薫君の年齢を確認しておきたい。我ながら少しくどいが、それ程に薫君の年齢は物語全体の基準値として重大な意味を持っている。読者、特に当時の事情に暗い現代の読者たる私などは、この物語を読むために、薫君の年齢と立場を基にして、他の人物の立ち位置や全体背景や事柄の意味を探ろうと努めざるを得ないわけで、必要不可欠の情報だ。が、それにも関わらず本文には、正にこの時点での薫君の年齢の明示が無く、匂兵部卿卷二章一段の「十四にて二月に侍従になりたまふ。秋、右近中将になり」という記事と、同卷二章五段での「十九になりたまふ年、三位の宰相にて、なほ中将も離れず」という記事の年齢および地位の明示を元に、此処にいたる物語展開から推測して、この場面での薫君の年齢を仮定することになるのであり、くどくなるのは明示が無い不確かさの所為であり、また不確かさの確認でもある。即ち、橋姫卷二章二段に於いて「宰相中将も御前にさぶらひたまひて」と、八宮と親交のある阿闍梨が冷泉院を訪れた際に薫君が同席していた、という説明で、薫君の宇治通いが始まる経緯が語られ出し、同四段に「心寄せ仕うまつりたまふこと三年ばかりになりぬ」と、昨年時点で薫君の宇治通いが三年続いた四年目の事であり、是等の事から、橋姫卷末時点を19歳からの四年目、または20歳からの三年目あたりの22歳の冬、と見做して、現在はその翌年の薫君23歳の春、と読んでいるわけだ。不確かさは残るが、今のところ、この推定が全体を破綻無く読み進めそうな無難な値だろうと私も踏んでいる。\*「参りあふ」の「あふ」は<間に合わせる=代理を果たす>だろう。\*「おとどをば」と匂宮に煙たがられてしまった源殿だが、彼は親王から見れば臣下身分ではあるものの、血縁では母方の伯父であり、現に皇太子の筆頭後見者であり、右家の関白格であった玉鬘の亭主が死んでしまった現在では、次期関白が即ち最高権力者であり、皇太子妃に娘を入内させても居て、その妃が御子を儲ければ次次摂政の座も狙えるという、

揺るぎ無い地位に、この源殿はいるのである。第三親王なれば表向きの礼節は取るにしても、実質では源殿は匂宮にとって全く頭が上がらない存在だ。だからといって、源殿が匂宮の女遊びに口を挿むとは思えず、場合によっては本人も関わろうとさえするかも知れないが、何となく目障りな気が引ける存在ではあるのだろう。

御子の君たち、右大弁、侍従の宰相、権中将、頭少将、蔵人兵衛佐など、さぶらひたまふ。 \*注に<夕霧の子息。『完訳』は「(夕霧の子は)もともと六人いるが、ここは次男以下か」と注す。右大弁(従四位上相当)、侍従宰相(正四位下相当)、権中将(従四位下相当)、頭少将(正五位下相当)、蔵人兵衛佐(従五位上相当)。>とある。となると、長男の地位が気になるが、一応は丁寧な説明ではありそうだが、「次男以下か」の根拠の一つには、竹河卷五章一段に正妻腹の三男について「三位の君は宰相になりて」とあって、この三男を此処では「侍従の宰相」と言っている、と読んでのことなのだろうか。であれば、しかし、この人の宰相昇進は源殿が右大臣から左大臣に昇進するのに伴う本年秋の人事であって、この時点では「三位中将」だったように思える。どうも、もう一つ分かり難い。それと、竹河卷の本文にもこの正妻腹の三男は朝廷に重用されて、中将ながらも「三位」だった(竹河卷四章七段)と明示されていた。ざっと、五位以上は役付きの管理職で殿上役人という上級職であったようだが、三位以上となると、役職とは別に身分として重役たちの仲間入りをした公卿であつたらしく、正に政府中枢を占める者の一人であつたようだ。尤も、薫君も三位中将で紛らわしい事この上なかったが。

帝、后も心ことに思ひきこえたまへる宮なれば(この兵部卿宮は天皇も皇后も特に可愛がっていらっしゃる親王なので)、おほかたの御おぼえもいと限りなく(発言の影響力が大きく)、まいて\*六条院の御方ざまは(それだけに皇后の血縁者である源氏一族は)、次々の人も(このように下位の者までが)、皆私の君に(皆この匂宮を自勢力の象徴たる主君として)、心寄せ仕うまつりたまふ(頼りにしてお仕え申しなさるのです)。 \*「六条院の御方ざま」とは<六条院を実家とする母方の血縁者である源氏御一族>という意味だろうか。「おおんかたさま」は<その方面の御方の事情>みたいな曖昧表現で、何でこんな言い方をするのかと文意をさぐれば、それは正に<母後の血縁者である自負によって>「皆私の君に心寄せ」申し上げる、と説明しているように見えて来る。となると、この「まいて」は単に<まして>と別の事情を挙げるのではなく、「后も心ことに思ひきこえたまへる宮なれば」を受けて<それだけに(後の血縁者であつてみれば)>という言い方をしているのであり、本来は「まいて」より「かく」と言うべきであり、更には、結びの「心寄せ仕うまつりたまふ」には下に「なり」をつけるべきもののように思われる。ともかく、妙に分かり難い文だ。

## [第二段 匂宮と八の宮、和歌を詠み交す]

所につけて(源大臣所領の宇治別荘では場所柄に相応しい)、御しつらひなどをかしうしなして(御簾や屏風などで御部屋模様を風流に仕立てて)、碁、双六、弾碁の盤どもなど取り出でて(碁盤、双六盤、おはじき盤などの遊具類を持ち出して)、心々にすさび暮らしたまふ(貴人たちは思い思いに遊び過ぎなさいます)。

宮は(兵部卿宮は)、ならひたまはぬ御ありきに(慣れていらっしゃらない御旅行に)、悩ましく思われて(お疲れになって)、ここにやすらはむの御心も深ければ(この別荘に泊まりなさろうというお気持ちも強いので)、うち休みたまひて(一休みなさって)、夕つ方ぞ、御琴など召して遊びたまふ(夕方になるとお琴などを用意させ為さって演奏なさいます)。

例の(前にも見たように)、かう世離れたる所は(このように都から離れた宇治では)、水の音ももてはやして(水の音までも引き立て役となって)、物の音澄みまさる心地して(楽器の音がいつそう澄み響いて聞こえて)、かの聖の宮にも(かの聖人の住処めく八宮邸にも)、たださし渡るほどなれば(すぐ漕ぎ渡れる近さなので)、追風に吹き来る響きを聞いたまふに(向かい風に乗って来る演奏をお聞きになると)、昔のこと思し出でられて(八宮は昔の都暮らしが思い出されて)、

「笛をいとをかしうも吹きとほしたなるかな(笛を實に見事に吹き届けて来るものだ)。誰ならむ(誰が吹いているのだろう)。昔の六条院の御笛の音聞きしは(昔の六条院兄君の御笛の音を聞いた時は)、いとをかしげに愛敬づきたる音にこそ吹きたまひしか(とても楽しげに表情豊かな音色でお吹きになっていたものだが)。これは澄みのぼりて(これは突き抜けた音で)、ことことしき気の添ひたるは(威厳のある感じなのは)、\*致仕大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ(藤原殿の御一族の笛の吹き方に似ている)」など、独りごちおはず(などと独り言を仰います)。 \*「ちじのおとどのおおんぞう」については、対岸の庭園から聞こえて来る笛の音を八宮が藤原殿ゆかりの誰かが吹くものと気付く、という語りで、その吹き手であろう薫君が、実は六条院の御曹司にあらずして、故衛門督の御遺児であることの疑義が、何時か誰かに抱かれかねない、という危うさを、この物語の面白さとして改めて読者に印象付けようとする作者の意図があるらしい。

「あはれに、久しうなりにけりや(もう遠い昔のことになってしまった)。かやうの遊びなどもせで(このような遊びもせず)、あるにもあらで過ぐし来にける年月の(生きていとも言えない状態で過ごしてきた年月が)、さすがに多く数へらるるこそ、かひなけれ(こんなに長くなってしまったとは情けない)」

などのたまふ\*ついでにも(などと、改めて失脚の無念さを口になされば)、姫君たちの御ありさまあたらしく(姫君たちのわび住まいが惜しまれて)、「かかる山懐にひき籠めては\*やまずもがな(このような山の懐深くで一生を終えさせたくはない)」と思し続けらる(と続いて思われなされます)。 \*「ついで」は<その折>だが、「その」とはこの場合、日頃は悟り済ましたように山荘で暮らしている八宮が、久しぶりに都暮らしの華やぎを懐かしんだ、という<懐古の気持のままに>という意味であり、それは即ち<失脚の無念さ>なのだろう。 \*「止まずもがな」の「もがな」は<～したいものだがな>と客観判断としては実現の難しそうな事態の実現を望むような微妙な言い方のようで、現代語では「言わずもがな」の定型句で<言うまでもなく(そうしたい、そうしたくない)>との語用が残るだけの終助詞、ということらしい。此处では、「ひき籠め」たまま「止まずもがな」だから<終わりにしたくない>という言い方なのだろう。

「宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを(宰相中將の薫君をどうせなら婿に迎えたいものだが)、\*さしも思ひ寄るまじかめり(そのようには考えるべきではないのだろう)。\*「さしも思ひ寄るまじかめり」については、注に<『集成』は「薫はそんなふうを考えてみようともしないようだ。仏道に専心する薫の人柄を思つてのこと」。『完訳』は「しかしそんな期待を寄せてはなるまい」「仏道に専心する薫ゆえ。宮は薫との結縁を願いながらも断念」と注す。>とある。内心文とは言え、敬語遣いが無いので、宮自身が主語の文と取って置く。

まいて今やうの心浅からむ人をば(まして今時の軽薄な若者を)、いかでかは(どうして婿に考えられようか)」など思し乱れ(などと思い乱れなさり)、つれづれと眺めたまふ所は(遣る瀬無く

物思いに耽っていらっしゃる八宮邸では、春の夜もいと明かしがたきを(短い春の夜もいつまでも明けないように長く思えるが)、心やりたまへる旅寝の宿りは(気ままに遊び興じていらっしゃる対岸の旅宿では)、酔の紛れにいと疾う明けぬる心地して(酔った騒ぎでいやに早く夜が明けてしまう気がして)、飽かず帰らむことを、宮は思す(このままでは物足りないままで帰ることになってしまうと匂宮はお思いになります)。

はるばると霞みわたれる空に(別荘の庭には全体に霞が広がる空に)、散る桜あれば今開けそむるなど(散る桜もあれば今開き始めるものもあって)、いろいろ見わたさるるに(いろいろな表情が見渡されるが)、川沿ひ柳の起きふしなびく水影など(宇治川沿いでは柳が風に起こされては押し靡かされている水面の景色が)、おろかならずをかしきを(ただならず興味深いのを)、見ならひたまはぬ人は(見慣れていらっしゃらない匂宮は)、いとめづらしく見捨てがたしと思さる(とても珍しく去り難くお思いなされます)。

宰相は(薫の宰相中将は)、「かかるたよりを過ぐさず(この機会を逃さず)、かの宮にまうでばや(八宮邸に伺いたい)」と思せど(とお思いになるが)、あまたの人目をよきて、一人漕ぎ出でたまはむ舟わたりのほども(大勢の人目を避けて一人で漕ぎ出しなざる舟行きというのもの)「軽らかにや(軽々しいか)」と思ひやすらひたまふほどに(と違って躊躇なさっている所に)、かれより御文あり(八宮の方から御手紙がありました)。

「山風に霞吹きとく声はあれど、隔てて見ゆる遠方の白波」(和歌 46-01)

「声はすれども姿は見えず、ほんにおまへは屁のような」(意識 46-01)

\*注に<八宮から薫への贈歌。『集成』は「前日聞えた笛の音の主を薫と推察しての歌。「遠方」は宇治に存した地名(今、宇治橋東詰め近くに彼方(をちかた)神社がある)で、「をち」(遠方、彼方)の意に掛ける。薫の来訪をうながす心の歌。『完訳』は「笛の音を薫のそれと聞いて、彼の不訪を恨んだ歌」と注す。>とある。「かすみふきとく」の「とく」は「解く」で<霞を吹き晴らす、吹き分ける>という言い方なのだろうか。私には、この「とく」がどうも快く聞こえない。尤も、和歌の詠み方のひとつには、普段云い慣れない言い方で新味を工夫する、という創造精神もあるようで、聞き慣れない事自体は良くある事らしいが、此处での語用は「隔て」に対しての<打ち解く>を枕にするとするよりは、先にネタバレさせているようで、あまりにあざとく、素直に情趣を味わう気分にはなれない。が、むしろ八宮が最初から酒宴に興じた冗句としての趣でこれを寄越して来たとするなら、その洒落語用には大人の遊び心がある、と読んで置きたい。いや、冗句だからこそ、三節を「こゑはあれど」とワザと六文字の溜めた言い回しをしてあるのではないか。そう言えば、「をちのしらなみ」の「白波・白浪」も<《「後漢書」靈帝紀から。黄巾の乱の残党で、略奪をはたらいた白波賊(はくはぞく)を訓読みしたもの》盗賊。どろぼう。>と大辞泉にあり、多分に<やくざ者め>の意を込めた冗句語用にも見えて来る。

\*草にいとをかしう書きたまへり(流し書きでとても風流な筆跡でいらっしゃいます)。 \*「さう」は和歌であってみれば、元々が漢字の草書体ではなく平仮名なので、それを堅苦しくなく流し書きしたものだろう。「をかし」は<如何にも戯れ歌めいた>という意味かとも思うが、其処まで言っては却って興醒めかと控える。

宮(匂宮は)、思すあたりのと見たまへば(姫君に御関心をお持ちの八宮邸からの贈歌とお知りになると)、いとをかしう思いて(とても面白がって)、「この御返りはわれせむ(この御返歌は私がしよう)」とて(と言って、こうお詠みなさいます)、

「遠方こちらの汀に波は隔つとも、なほ吹きかよへ宇治の川風」(和歌 46-02)

「川を隔てた兩岸に、便り通わす宇治の川風」(意識 46-02)

\*注にく匂宮から八宮への返歌。「吹く」「隔つ」「彼方」「波」の語句を用いて返す。>とある。「をちこちのみぎはになみはへだつともなほふきかよへうぢのかはかせ」は、「をちこちの」と固い語感で詠い出した後が、「な」行と「は」行の何とも柔らかい川風の音感。「うぢ」には、やはり「憂し」の心憎い語感が込められているのだろう。

[第三段 薫、迎えに八の宮邸に来る]

中将は参うでたまふ(薫中将は八宮山荘に参上なさいます)。遊びに心入れたる君たち誘ひて(演奏に長けた貴公子たちを誘って)、さしやりたまふほど(舟を棹挿し進みなさる時に)、\*酣酔楽遊びて(酣酔楽を演奏して)、水に臨きたる廊に造りおろしたる階の心ばへなど(川辺に向かつて伸ばしてある山荘の廊下から水面に造り下ろしてある棧橋の意匠などが)、さる方にいとをかしう(洒落ていて面白く)、ゆゑある宮なれば(情趣に造詣の深い八宮の人柄が偲ばれて)、人びと心して舟よりおりたまふ(一行は畏まって舟から降りなさいます)。\*「酣酔楽(かんすいらく)」は<雅楽の一。高麗老越(こまいちこつ)調。四人舞。廢曲。>と大辞林にある。「高麗老越調」は「雅楽の音楽研究書」サイトの当該ページに<高麗笛の運指(指を押さえる穴の位置)が唐楽の老越調と同じため高麗老越調と呼ばれていますが、音階のルート音は平調となっています。>とあるが、素養の無い私にはチンプンカンプンで、さらに<現在まで伝えられている高麗楽の大半が、この調子の楽曲です。また、「納曾利」や「胡蝶」など、高麗楽の中でも頻りに演奏される楽曲も、ほとんどがこの調子の楽曲です。>と解説があったので、ユー・チューブにアップされていた天理大学の「舞楽納曾利」動画を見聞きして僂んだ。

ここはまた(此方の山荘は対岸の別荘とは)、さま異に(趣向が違って)、山里びたる\*網代屏風などの(山里風な網代屏風などで)、ことさらにことそぎて(殊更簡素にしてある)、見所ある御しつらひを(見応えのある御部屋模様を)、\*さる心してかき払ひ(予め客人を迎える心算で掃除片付けをして)、\*いといたうしなしたまへり(十分に持て成しの菓子などを用意なさっていらっしやいました)。\*「あじろびやうぶ」は竹編製の屏風衝立だろうが、私の印象では夏の風情の家具で、暖かさが増す陰暦二月とは言え、川沿いの山荘では寒々しように思えるが、確かに簡素な演出ではありそうだ。\*「さる心して」は注にく『集成』は「薫一行を迎える心積りで」と注す。>とある。\*「いといたうしなす」は何を如何したと言うのか。「さる心して」が<客人を迎える準備をして>なのだろうから、掃除をした後で、菓子類などを皿に盛ってあったのだろうと思って置く。女房内では分かり切った話でも、端折らずに書いて欲しい。

いにしへの(昔から王家に伝わる)、音などいと二なき弾きものどもを(音色や装飾などがまたとなく優れた弦楽器の名品類が)、わざとまうけたるやうにはあらで(わざわざ用意したようではなく無造作に部屋に置いてあるのを)、次々\*弾き出でたまひて(八宮は次々と取り出しなさって、一行に演奏を勧めなさるので)、老越調の心に(貴公子等は老越調の調子で)、\*桜人遊びたまふ(催馬楽の作久良人を謡い遊びなさいます)。\*「ひきいづ」は「弾き出づ」なのか。「引き出づ」ではない

のか。八宮が御琴類を次々と取り出して貴公子らに弾奏を勧めなされた、という場面と読んで置きたい。\*「さくらびと」は注にく『完訳』は「高麗楽「桜人」が呂の曲であるのを、老越調（律の調子）に移して」と注す。>とある。ただ、「桜人」は以前にも薄雲巻や少女巻で取り上げられた催馬楽で、歌詞に「彼方に（をちかたに）妻去る夫は（つまさるせなは）明日も真来じや（あすもさねこじや）」[日本古典文学全集]とあるので、匂宮の返歌に掛けた洒落謡いのようなでもあり、その<向こう側に女が居る男は明日も決して帰らない>という歌意は自分たちが姫目当てである事を八宮に示してもいるのだろう。こういう事が「桜人遊びたまふ」の一言で暗意される、というのは、この文がつくづく当時の現代語で、生き生きと生活実感いっぱい書かれているらしい、と思われ知らされる。現代語文の面白さと難解さ、みたいな。また、「桜人」が呂の曲（という意味も私には分からないが）とされているようなことについても、元が催馬楽という遊び歌なのだから、文句は決まっても、曲はむしろ此処に記されるように、その場の気分で変えるような、いくつかの変形があった、というように見て置きたい。

主人の宮、\*御琴をかかるといふ（八宮が七弦古琴をこういう機会であつてみれば、お弾きなされることもあるかと）、人びと思ひたまへれど（貴公子たちはお思いなされたが）、箏の琴をぞ、心にも入れず、折々掻き合はせたまふ（八宮は十三弦の箏の琴をほんの形ばかりに間を取って伴奏なさいます）。耳馴れぬけにやあらむ（それでさえ、耳慣れない音色だった所為か）、「いともの深くおもしろし（大変に情緒があつて素晴らしい）」と、若き人びと思ひしむたり（と若い公達は感じ入りました）。\*「御琴」は「おおんきん」と読みがある。七弦古琴だ。注にも<八宮が琴の名手であることは人々に知られていた。>とある。

所につけたる饗応、いとをかしたまひて（八宮は客人たちに宇治らしいご馳走でとても風流に接待しなされて）、\*よそに思ひやりしほどよりは（公達が話に聞いて想像していた侘しい山暮らしとは違って）、\*なま孫王めくいやしからぬ人あまた（何となく王家血筋めいた身分の高そうな人が何人も）、\*大君、四位の古めきたるなど（王族の四位の年配者などだろうか）、\*かく人目見るべき折と（このように八宮邸に多くの来客を見る事になるだろうと）、かねて\*いとほしがりきこえけるにや（匂宮一行の長谷詣での盛大さから、かねて期待申していたようで）、さるべき限り参りあひて（主だったものが全員参集して）、\*瓶子取る人もきたなげならず（徳利を持って酒を勧める人も見苦しくない装束で）、さる方に古めきて（如何にも古風に）、よしよしうもてなしたまへり（行儀作法に詳しそうに応接なさいました）。\*「よそに思ひやりしほど」の主語は誰か。この場に敬語遣いがなくて良さそうな人はいないように思えるが、取り分け、八宮に敬語が無いのは考え難いので、となると、客人の公達ということになりそうだ。ただ、此処から「きたなげならず」までが「然る方」を説明している地文のように聞こえたりもして、であれば、「ほどよりは」は単に<思った以上に>という一般意での副詞語用で「きたなげならず」を修飾しているのかも知れないが、だとしたら随分乱暴な構文構成をしたもんだと呆れる。というわけで、主語さえ定かならずままに、それでも一応は<公達>を主語と見做すが、とにかく、此処から厭になるほどの難文が始まる。\*「なまそんわうめく」は<何となく王家血筋めいた>という意味だろうが、この言い方自体の語感はどうなんだろう。私には敬意が感じられない。身分は高貴でも金回りは余り良くなさそうだ、みたいな、源氏家や藤原家の権勢家による上から目線のような語り口に聞こえる。別にそういう意図のない普通の言い方なのかもしれないが、読者によっては差し障りがありそうな気が、フとした。\*「おほきみ」は此処では<諸王（しよわう）>の意味らしく、「諸王」は<親王の宣下がなく、また、臣籍にも入らない皇子・皇孫。>と大辞泉にある。「四位（しゐ）」は、親王の「品（ほん）」や臣下の「位階」とは別の、王族に付与された「位階」の四等位で、一定の田地分の管理権を伴った身分待遇だったらしい。なお、この「大君〜いとほしがりきこえけるにや」は「人あまた」の補足挿入句となる構文で、「にや」は「古めきたるなど」に掛かっている。\*「かく人目見るべき折」は渋谷訳文に<このよう

に大勢客人が見える時>とある。「人目」は<人気>であり、また<人目に付く賑わい=大勢の往来>でもありそうで、匂宮一行の盛大な長谷寺詣でと、その旅宿が八宮邸の対岸の源殿の別荘に構えられた事を聞き知った宮筋の縁者たちが、興味半分に宮邸に集っていた、みたいな事態の説明をしているのだろうか。「見るべき折」も分かり難いが、この「べし」は推量の助動詞で、やはり匂宮一行の挙動から八宮の縁者たちが、こういう機会がありそうだと察した、という文意だろうか。なべて、この「なま孫玉めくいやしからぬ人あまた」には敬語遣いがなく、だからこそ、この文もこの人たちが主語なのだろうとは思えるが、どうしてこんな分かり難い言い方が出来るのか不思議なほどの難文だ。\*「いとほし」の最も無難な解釈は<気懸かりに思う>だ。が、此处では「いとほしがる」で<期待する>という言い方なのだろう。\*「瓶子(へいじ)」は<酒をいれて、つぐのに用いる器。形は細長く、胴が張って口が小さい。銅・錫(すず)・陶磁器などで作る。徳利(とくり)。>と大辞泉にある。

客人たちは(まらうとたちは)、御女たちの住まひたまふらむ御ありさま(姫君たちが住んでいらっしゃるらしいお暮らしぶりを)、思ひやりつつ(想像しては)、心つく人もあるべし(興味を持つ人もいるようです)。

#### [第四段 匂宮と中の君、和歌を詠み交す]

かの宮はまいて(対岸の匂宮はそうした公達以上に姫君たちに興味をお持ちで)、かやすきほどならぬ御身をさへ、所狭く思さるるを(気軽に動けない御身分の高ささえ窮屈に思えなさいますが)、かかる折にだにと、忍びかねたまひて(このお近づきを折角の機会だからと遠慮申し兼ねなさって)、\*おもしろき花の枝を折らせたまひて(庭に咲いた美しい桜の枝を折らせなさって)、御供にさぶらふ\*上童のをかしきしてたてまつりたまふ(御供に仕えている殿上童の可愛らしい者を使者にして姫君に差し上げなさいます)。\*「おもしろき花」については、二段に「はるばると霞みわたれる空に、散る桜あれば今開けそむるなど、いろいろ見わたさるるに」と前振りがあつた。\*「うへわらは」は<貴族の子で、宮中の作法見習いのため、昇殿を許されて奉仕する少年少女。「殿上童」とも。>と古語辞典にある。

「山桜匂ふあたりに尋ね来て、同じかざしを折りてけるかな (和歌 46-03)

「山桜 尋ね手折りし 懐かしさ (意識 46-03)

\*注に<匂宮から姫君たちへの贈歌。「同じかざし」は同じ皇族の血縁、親しみをこめていう。『河海抄』は「我が宿と頼む吉野に君し入らば同じかざしをさしこそはせめ」(後撰集恋四、八一〇、伊勢)を指摘。>とある。「同じ折」に居合わせた者同士なのでお近づき申したい、という挨拶だろうか。下の「野を睦ましみ」も正にそういう言い方を型取っているように見える。それでも、指摘の参照歌や「匂ふ」「折る」「睦む」の語に情交の響きはあるが、匂宮がそのイヤラシイ気持を滲ませたのか、明示したのか、その語感には私には良く分からない。

\*野を睦ましみ(親しく遊びたいものです)」とやありけむ(という添句でもあつたのでしょうか)。\*「野を睦ましみ」は注に<歌に添えた言葉。『源氏積』は「紫のひともとゆゑに武蔵野の草は見ながらあはれとぞ思ふ」(古今集雑上、八六七、前太政大臣)「春の野に菫摘みにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける」(古今六帖六、すみれ)を指摘。三光院は「草子の地なり」と指摘。>とある。「野をなつかしみ一夜寝にける」を「野を睦ましみ」と言い換えた、ということは、やはり情交は暗意ではなく明示なのだろうか。



「御返りは、いかでかは(お返事は如何言えば良いものやら)」など、\*聞こえにくく思しわづらふ(などと姫君はお応え申しにくく困りなさいます)。 \*「聞こえにくく」は句宮の表現があまりに露骨なので応答するに気が引けた、という意味だろうか。それ以前に世慣れていない、という意味だろうか。どうも今ひとつ、語り口の味わいが素直に呑み込めない。

「かかる折のこと(こんな座興の席では)、わざとがましくもてなし(特別な恋文のように応対して)、ほどの経るも(熟考して返歌が遅れるのも)、なかなか憎きことになむしはべりし(却って思わせぶりです都合になってしまいます)」

など、古人ども聞こゆれば(などと古女房たちが助言申し上げたので)、中の君にぞ書かせたてまつりたまふ(八宮は妹姫の方に返歌を詠ませなさいます)。

「かざし折る花のたよりに、山賤の垣根を過ぎぬ春の旅人 (和歌 46-04)

「山小屋に 花だけ寄せて 帰る人 (意識 46-04)

野をわきてしも(野を分けてまでは、お越しなさるまい)」

と、いとをかしげに(と実に気が利いた歌を)、らうらうじく書きたまへり(上手な字でお書きなさいました)。

げに(この歌の贈答の使者の往来に呼応して)、川風も心わかぬさまに吹き通ふ物の音ども(川風も南風から北風に変わる向きに乗せて対岸の双方が吹き通わす笛の音などを)、おもしろく遊びたまふ(公達は風情豊かに演奏なさいます)。

御迎へに(句宮のお迎えに)、\*藤大納言、仰せ言にて参りたまへり(藤大納言が勅使として源殿の宇治別荘に参上なさいました)。 \*「とうだいなごん、おほせごとにて」は注に<紅梅大納言。故柏木の弟。帝の勅命によって。>とある。

人びとあまた参り集ひ(人びとが多数参集する事と成り)、もの騒がしくてきほひ帰りたまふ(物騒がしく競うようにして句宮一行はお帰りなさいます)。\*若き人びと(若い供人たちは)、飽かず返り見のみせられける(名残惜しく宇治の橋姫を振り返ってばかりしてしまいます)。宮は(句兵部卿宮は)、「またさるべきついでして(また適当な機会でも作って、再来しよう)」と思す(とお思いなさいます)。 \*「若き人びと」は注に<句宮に最初から付き従っていた若い供人たち。>とある。特に、薫中将につき従って八宮邸を訪れた者たち、のようにも思えるが、その他にも含めた「若い供人たち」でもありそうだ。

花盛りにて(花盛りの頃だったので)、四方の霞も眺めやるほどの見所あるに(何処の眺めも霞み棚引く風情があつて)、唐のも大和のも、歌ども多かれど(この遠出では漢詩や和歌がたくさん詠まれたようだが)、\*うるさくて尋ねも聞かぬなり(女の耳には高尚過ぎて尋ね聞きもしませんでした)。 \*「うるさくて尋ねも聞かぬなり」は既に何度も使われている女房の省筆の弁、の類なのだろう。

もの騒がしくて(この宇治行きでは物騒がしくて)、思ふままにもえ言ひやらずなりにしを(満足に姫との応答も出来ずじまいだったのを)、飽かず宮は思して(物足りなく匂宮はお思いになって)、しるべなくても御文は常にありけり(それ以降は薫中将という仲介者抜きでも御手紙が姫君に常にあったのです)。

宮も(八宮も)、「なほ、聞こえたまへ(また御返事申しなさい)。\*わざと懸想だちてももてなさじ(しかし、懸想立たないように注意して書くように)。なかなか心ときめきにもなりぬべし(変な執心が起こると厄介です)。いと好きたまへる親王なれば(兵部卿宮は遊び好きの親王なので)、かかる人なむ、と聞きたまふが(宇治の山里にこうした姫が居るとでも中将などからお聞きになっての)、なほもあらぬすさびなめり(他愛無い冗談でしょうから)」 \*「わざと」は、「懸想だちても」に条件強調の係助詞「も」が使われているので、副詞語用の<殊更に>という一般意で「もてなさじ」に係るのではなく、個別事情の「懸想だち」に<特に注意して>の意で係り、「もてなさじ」は<そうならないようにしよう>という文意なのだろう。

と、そそのかしたまふ時々(と返事を促しなされる時々には)、中の君ぞ聞こえたまふ(妹姫がお応え申しなさいます)。姫君は、かやうのこと、戯れにももて離れたまへる\*御心深さなり(姉姫はこうしたことは戯れにしてもなさらない御用心深さです)。 \*「みこころぶかさ」は<思慮深さ>と言えるのかもしれないが、では妹姫は浅慮なのか。むしろ、姉姫は長女ゆえの宮家の格式を背負う自負心から極度に失敗を恐れる引っ込み思案性格の面があつて<用心深い>のかと思う。実際に、昨秋の薫中将との応対でも、家の恥を恐れて不慣れながらも自ら応答する場面があつて、いじらしい印象がある。また、それだけに妹宮の軽さも可愛らしい。

いつとなく心細き御ありさまに(いつともなく常に心細い山荘のお暮らしぶりだが)、春のつれづれは(春の芽吹く季節に若い身空を無為に過ごすのは)、いとど暮らしがたく眺めたまふ(二人の姫君にはいっそう張り合いなく気が滅入りなさいます)。ねびまさりたまふ御さま容貌ども(妙齢でいらっしゃるお二人のお姿お顔立ちは)、いよいよまさり(いよいよ優れて)、あらまほしくをかしきも(申し分なく美しいのが)、なかなか心苦しく(却って心に重く)、「かたほにもおはせましかば(不器量でいらしたら)、あたらしう(それはそれで残念だが)、惜しき方の思ひは薄くやあらまし(不憫に思う分に付いては軽いだらうに)」など、明け暮れ思し乱る(などと八宮は常日頃苦悶なさいます)。

\*姉君二十五(姉君は 25 歳)、中の君二十三にぞなりたまひける(妹君は 23 歳におなりでいらっしやいました)。 \*「あねぎみ」という言い方は珍しいが、現代語では普通に分かり易い言い方だ。この語りでは多く、姉姫は「姫君」で、妹姫は「中の君」や「若君」とされている。また、注には<『完訳』は「当時の上流貴族の姫君は、十五、六歳で結婚するのが普通」と注す。結婚適齢期という通念はないが、婚期を過ぎた姉妹である。>とある。ともかく、非常に重要な年齢の明示記事ではある。この時点まで、薫君や匂宮に姫君たちの年齢が明確には認識されていなかった、という意味なのだろうか。此处で年齢を明かす妥当性や根拠みたいなものは不明で、従って作者の意図も不明だ。当時の世相に不案内な私などは、とにかく早めに年齢のような重要な人物要素は示してほしい所だが、詮も無い。明示があるだけマシ、とも思うが、前提年齢で人物像の印象は大きく異なるので、明示するなら、やはり早い方が良い。

## [第五段 八の宮、娘たちへの心配]

宮は、重く慎みたまふべき年なりけり(八宮は固く謹慎なさるべき数え 61 歳の本厄に当たる年でした)。 \*注に<八宮は男の厄年六十一歳。>とある。とは即ち、是も年齢の明示だ。橋姫巻では明示が無かったので、十宮である冷泉院の年齢から推して、八宮を 50 歳代半ばくらいと見当を付けたが、昨年の時点で 60 歳だったようだ。因みに、冷泉院はこの年で 52 歳、光君存命なら 71 歳(死去年齢の明示が無いので推定だが、現在死後十数年)、朱雀院 74 歳、また源殿 49 歳、藤殿 54 歳、匂宮 24 歳、薫君 23 歳。序でながら橋姫巻四章三段に「弁の君とぞいひける年も六十にすこし足らぬほどなれど」とあって、この人は八宮より高齢かと思っていたが、八宮のほうが僅かに年上だったらしい。

もの心細く思して(やはり心細く気になさって)、御行ひ常よりもたゆみなくしたまふ(御念仏行を例年に増して熱心に勤めなさいます)。

世に心とどめたまはねば(八宮は現世に執着心をお持ちでない)、\*出で立ちいそぎをのみ思せば(死に支度ばかりお考えなので)、\*涼しき道にも赴きたまひぬべきを(極楽浄土にも向かいなさるだろうが)、 \*「いでたちいそぎ」は<出発準備>だろうが、前に「世に心とどめたまはねば」とあっては<死に支度=身辺整理>を意味するのだろう。 \*「涼しき道」は<極楽浄土に行く道。また、極楽浄土。>と大辞泉にある。仏教用語の類らしい。

ただ\*この御ことどもに(ただこの姫君たちの行く末が)、いといとほしく(とても気懸かりで)、限りなき御心強さなれど(深い御信仰心でいらっしゃるが)、「かならず、今ほと見捨てたまはむ御心は、乱れなむ(必ずご臨終で姫君たちとお別れなさる時のお心は乱れるでしょう)」と、見たてまつる人も\*押し量りきこゆるを(と身の回りの御世話をお仕え申す女房たちも押し量り申し上げますが)。 \*「この御ことども」の「御」は<姫君>に対する尊意。「こと」は<縁談>。「ども」と複数なのは二人だから。 \*「押し量りきこゆるを」の「を」を接続助詞と見て、下文の「尋ねきこゆる人もなし」で受ける、という力技を労する読み方をする必要性は無い、と思う。続く「思すさまには～」以下の変則文は、「押し量りきこゆるを」を、文脈としては受けているようでもあるが、主語を補語して校訂すれば同一文として成立していない事は分かるので、構文として受け切れていない。私見による校訂は次の項目に記すが、「尋ねきこゆる人もなし」は地文ではなく、其処が文落ではない。どうしても、「を」を受ける読み方をするなら、下に<いかならむや>あたりが省かれている、と見れば良いかも知れない。が、そんな無茶な読み方はせずに、むしろ文意は「押し量りきこゆる」で終わっていて、この「を」は余情表現または感嘆の終助詞くらいに見る方が、よほど読み易いかと思う。

思すさまにはあらずとも(父宮は姫君たちの婿候補を、理想的ではなくても)、「\*なのめに、さても人聞き口惜しかるまじう(普通に、とはいえ陰口を叩かれないほどの)、見ゆるされぬべき際の人(世間体が釣り合う身分の人)、真心に後見きこえむ(誠意を持って御世話申そう)、など、思ひ寄りきこゆるあらば(などと姫に心を寄せ申す者があれば)、知らず顔にてゆるしてむ(他のことには目を瞑って結婚を許そう)、一所一所世に住みつきたまふよすがあらば(お一人お一人がそれぞれ暮らしが立つ縁があれば)、それを見譲る方に\*慰めおくべきを(その男を任せる相手に決めて一安心出来るのだが)、さまで深き心に尋ねきこゆる人もなし(そこまでの深い気持で姫君に結婚を申し込む人もいない)。 \*「なのめに～」以下は八宮の内心文として括弧校訂すべきもの、に見える。仮定思考文を示す助動詞「む」によって構成されている論理構文を地文とは見做せないだろう。では、内心文は何処

まで続くのか。とは即ち、何処からが地文なのか、でもあるわけだが、実は下に「なげのいらへをだにせさせたまはず」と八宮を敬語遣いで客観的に描写した語りがあって、是が地文であることは分かり易く、となると、その前の「て」が事情説明の接続助詞であると同時に、内心文を外形的に閉じる格助詞「と」の代用にもなっている言い方に見えるので、「めざましう」までを内心文と見做したい。

\*まれまればかなきたよりに(偶々その場に居合わせた縁で)、好きごと聞こえなどする人は(口説き掛けたりする人は)、まだ若々しき人の心のすさびに(ただ若い盛りの気が多い冗談に過ぎず)、\*物詣での中宿り(寺参り途中での旅宿での)、行き来のほどのなほざりごとに(川を挟んで行き来したような一時の慰め事に)、けしきばみかけて(懸想めいて言い寄り)、さすがに(そういう遊び半分で)、かく\*眺めたまふありさまなど推し量り(このように思い沈んでいらっしやる姫たちの暮らしぶりを貧相に推し量って)、あなづらはしげにもてなすは(軽んじて振る舞うのは)、めざましう(心外だ) \*「まれまればかなきたよりに」という八宮の判断は、匂宮の長谷寺詣でが「古き御願なりけれど、思しも立たで年ごろになりけるを、宇治のわたりの御中宿りのゆかしさに、多くは催されたまへるなるべし」(一段)とあったことからすれば、誤りであるようにも見えるが、むしろ娘を傷付けたくない親心と読むべきなのだろう。 \*「物詣での中宿り」は匂宮の個別事情だろうに「御」の敬称もなく、敬語遣いも避けている。八宮の内心思考文だからだ。 \*「眺めたまふ」の主語は姫君たち。八宮は娘にだけは敬語を使う。つまりは、娘を思っている八宮の思考である事が示されている、のだろう。

て(と考えて)、\*なげのいらへをだにせさせたまはず(風情遊びに乗るような返歌さえ妹姫にさせなさいません)。 \*「なげ」は<何気ない=無造作、投げ遣り>という一般語用ではなく、「なげのあはれ(遊びの恋)」の「なげ」で<軽々に誘いに乗る>という言い方なのだろう。

\*三の宮ぞ(匂宮はその妹姫の素っ気無い御返書に)、なほ見ではやまじと思す御心\*深かりける(いっそう会わずにはいられないと思う御気持ち深まるのでした)。\*さるべきにやおはしけむ(その算段はきっとお考えなのでしょう)。 \*「三の宮ぞ」の「ぞ」の強調は、上文にある姫の素っ気無い返事を読んだくところの三の宮は>という言い方なのだろう。また、この係助詞「ぞ」を受けて、文末の「ありけり」が「ありける」と連体形で結ばれる。 \*「深かりける」は「深くありける」の音便。「ありけり」は「深し」という静状態ではなく、「なほ」を受けた動状態の叙述。 \*「さるべし」は「見ではやまじ」を受けて<見むべし>を意味する。「にや」は<きつと>くらいの強い推量を示す。「おはしけむ」は単純推量の敬語表現。